



発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

池上遺跡現地見学会・発掘体験

現在発掘調査中の、(仮称)道の駅「くまがや」整備事業地内の池上遺跡において、令和5年2月25日(土)に現地見学会及び発掘体験を実施しました。

池上遺跡では、これまでに弥生時代中期～奈良・平安時代の遺構・遺物が多数検出され、主な遺構として、竪穴建物跡が35軒(弥生時代14軒、古墳時代21軒)、掘立柱建物跡が20棟(弥生時代3棟、平安時代17棟)、方形周溝墓3基(弥生時代2基、古墳時代1基)などがあります。

これらの成果を、市民の方々に御覧いただく機会として、同日午前に見学会を開催しました。参加者は120名程度で、年配の方や、親子での参加の方もいて、強風という悪天候にも関わらず、皆さん、解説する職員の説明に熱心に耳を傾けていました。

午後は小学生の親子による発掘体験を実施しました。河川跡や沼跡、住居跡などが検出されている箇所に分散し、職員からの説明を受けながら、黙々と土と格闘し、土器が出てくるまで、一所懸命に掘っていました。土器を発見すると、興奮した声を上げて、親子共々喜びの笑顔を見せてくれました。

池上遺跡の調査は今年度の3月で終了しますが、約3年間の調査で多大な成果を上げることができました。今後は調査成果を整理し、調査報告書作成に向けて邁進してまいります。(腰塚)



熊谷市指定文化財管理状況悉皆調査

令和3年度から令和4年度にかけて、市指定文化財管理状況を確認する悉皆調査を実施しました。

熊谷市には国・県・市指定文化財が約300件あり、市指定文化財の約250件について調査対象としました。この調査は約5年おきに市教育委員会及び市文化財保護審議会が行っており、文化財の保存状況の確認や所有管理者の現状についての情報を把握し、的確な文化財保護事業を進める上で重要な調査となっています。

令和3年度における神社仏閣及び公共施設等の所有文化財に関する管理状況調査に引き続き、令和4年度は、個人・地元自治会・檀徒総代会組織が所有する市指定文化財の調査を実施しました。また、個人が市立熊谷図書館及び埼玉県立文書館に寄託しているものを除き、現在の所有者に関する情報の更新等を行いました。

調査により、所有者の相続状況や文化財の保管場所の変更などの現状が確認できた一方、文化財の所有者の負担軽減や永続的な保存に向けた対策の必要性など、新たな課題についても考える機会となりました。(山下)

画像 上：市指定有形文化財「八幡神社絵図」(個人所蔵)

下：市指定有形民俗文化財「藍染絵馬」(宝乗院愛染堂所蔵)



市内遺跡発掘情報

令和4年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査

上之土地区画整理事業区域内では、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する箇所について事前に発掘調査を行っています。今回は、令和4年6月から11月まで実施した前中西遺跡の調査について御紹介いたします。

今回の調査地点は、遺跡範囲北西部に位置します。本調査地点では、弥生時代中期後半（約2,000年前）の竪穴住居跡、方形周溝墓（成人用の墓）、土器棺墓（乳幼児用の墓）、古墳時代後期の（約1,400年前）の竪穴住居跡、溝跡などが見つかっており、これらの遺構からは大量の遺物が出土しました。

今回の調査で特筆すべき成果としては、古墳時代後期の竪穴住居跡から鏡の破片が出土したことが挙げられます。出土した鏡は、紐を通すつまみの周囲に神獣が刻まれていることから「獣形鏡（じゅうけいきょう）」（右写真）と呼ばれる鏡です。鏡が出土した竪穴住居跡は、意図的に埋め戻されていたことから、鏡はお祭りの際に使用され、破碎され埋められたと考えられます。（松田）



奈良文化財研究所「報告書デジタル作成課程」受講報告

令和4年12月に1週間の日程で、奈良県にある独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所で文化財担当者専門研修「報告書デジタル作成課程」を受講しました。奈良文化財研究所（右写真）は、奈良の文化財、埋蔵文化財の研究や平城京跡の発掘調査、復元作業などをおこなっており、また、文化財担当者向けの様々な専門研修会を開講しています。今回の「報告書デジタル作成課程」もその研修の一つです。



発掘調査成果は、調査報告書として冊子を作製します。これまでは入稿する際は紙図版などを作成していましたが、近年では Adobe 社の Illustrator や Photoshop、Indesign などの編集ソフトを用いてデジタル入稿することに変わりつつあります。しかし、全国的にみると、このデジタルでの作成は浸透しておらず、本市でも導入しましたが、手探り状態で作業している状態です。

研修は、今後主体的になっていく、このデジタル入稿に伴う作業ノウハウの講義でした。専門的な水準の講義であり、多様な知識の吸収はできたものの、今後はこの研修成果をいかに業務に反映させるかが、一つの課題であると考えています。調査報告書は、調査後の当該遺跡の情報を知りえる媒体となるため、着実に今回の研修結果を業務に反映させていきたいと考えます。（腰塚）

連載 くまがやの古墳群

① 東山古墳群 – 古墳時代最終末期の小型前方後円墳ほかで構成される古墳群 –

東山古墳群は、大里地区の青山、荒川右岸の江南台地東南端、小支谷の最奥部の標高約46～47mを測る台地に所在していた古墳時代終末期（飛鳥時代）に造られた古墳群です。

本古墳群の発掘調査では、前方後円墳1基と円墳1基が確認されましたが、調査後削平され消滅しています。

前方後円墳の第1号墳は、全長45.4mで、調査時点で既に削平を受け、墳丘及び埋葬施設は検出されませんでした。周溝から凝灰岩、緑泥石片岩、河原石が検出され、これら石材を使用した横穴式石室があったと推定されます。また、石材とともに、石室の副葬品と考えられる須恵器フラスコ形長頸壺（ちょうけいこ）、ガラス小玉、鉄鏃（てつぞく）・刀子（とうす）が出土しています。

本墳で注目されるのは、既にあった円墳に前方部を付設して前方後円墳に改変した痕跡が確認されたことです。埴輪の樹立がないことや墳形から7世紀初頭頃の築造と推定されます。

なお、円墳の第2号墳は、直径約8.5mの小規模なもので、凝灰岩切石積み、竪穴系横穴式石室、周溝から須恵器フラスコ形長頸壺、鉄鏃が検出され、埴輪の樹立がないことや石室の形態から7世紀代の築造と推定されます。

本古墳群は、7世紀前半まで存続したと推定されますが、かつてこの周辺では多くの埴輪が確認されていたことから、6世紀代から築造が開始された可能性も考えられます。（吉野）



（写真：第1号墳 後円部と前方部との境にある溝（↓）が円墳からの改変の証拠）

◇第15回地域伝統芸能今昔物語映像記録会

本年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、公演事業については、市指定無形民俗文化財保存団体の6団体・一般芸能6団体、計12団体の出演による映像記録会として開催しました。

東別府祭ばやし保存会、上川原神道香取流棒術保存会、間々田万作おどり保存会、手島楽友会、上新田屋台囃子保存会（写真）、池上獅子舞保存会、青桐会、生田流箏曲雅会、藤間流日本舞踊藤蓉会、熊谷の唄保存会、大里沖縄舞踊愛好会、熊谷祇園囃子「彩鼓連」が出演し、日々の練習の成果を披露する機会となりました。伝統芸能を次世代に継承することを目的に、児童生徒を初めとした多くの若手の出演があり、収録された映像は記録保存するとともに、動画共有サイト「YouTube」での配信による公開を進めています。（山川）



◇谷津沼・谷津田の歴史をめぐる日本農業遺産認定

令和5年1月、比企丘陵農業遺産推進協議会が申請していた「比企丘陵の天水を利用した谷津沼農業システム」が日本農業遺産として認定されました。

日本農業遺産とは、社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接に関わって育まれた文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を認定する枠組です。

埼玉県比企丘陵地域（滑川町、東松山市、熊谷市、嵐山町、小川町、吉見町、寄居町）は、谷津地形（丘陵地で形成された谷状の地形、右上写真）を活かして多数のため池を築き、谷津田での稲作と谷津斜面での少量多品目の畑作を営んでいます。ため池と谷津田は河川からの引水などがなく、天水のみを水源とした閉鎖系の水利システムとなっていることから、貴重な生態系の維持も特徴の一つです。「沼下」と呼ばれる伝統的な水利組合組織により、きめ細かな水管理が行われており、地理的な水源確保の困難性を克服した水供給システムです。江南文化財センターでは、この農法に関する歴史的な資料などの調査研究を進め、今後の啓発に向けて取り組む予定です。（山下）



◇江南サイフォン研究会の開催

令和4年10月25日、農業用水の土木遺産として評価される「江南サイフォン」の記憶を次世代に継承することを目的に作成された報告書『荒川流域の土木技術遺産「江南サイフォン」とその時代一埼玉県熊谷市における「江南サイフォン」と大里用水の歴史をめぐるアーカイブ』の発行に合わせ、調査報告と対談による研究会が開催されました。



昭和時代初期（昭和11年）、荒川の河床下に建設された「江南サイフォン」、は江南地域に農業用水の恵みをもたらした貴重な土木遺産です。平成時代、国の新たな整備事業によって江南サイフォンの構造は撤去されましたが、その一部が近代化遺産として保存されています（左写真）。今後も、地域の歴史遺産としての価値を再認識できたらと考えています。（山下）

【文化財探訪 竹井澹如とめぐる長唄さんぽ】

令和5年2月26日、「竹井澹如とめぐる長唄さんぽ シリーズⅠ」が、市指定名勝「星溪園」の積翠閣で開催されました。

長唄と三味線は、東京藝術大学出身で熊谷在住の若手演奏者の三井千絵さん（唄）と三味線の田中日奈子さん（右写真、左：三井さん、右：田中さん）によって演奏されました。演奏では、長唄「末広がり」「勝三連獅子」「時致」という名作を、2回公演し合計約60名が堪能されました。

演奏の冒頭には、熊谷宿本陣の竹井家当主で星溪園を創設した竹井澹如と渋沢栄一の関わりについて解説しました。今後も、星溪園での文化発信を進めていきたいと思っております。（山下）

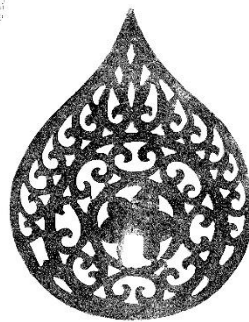
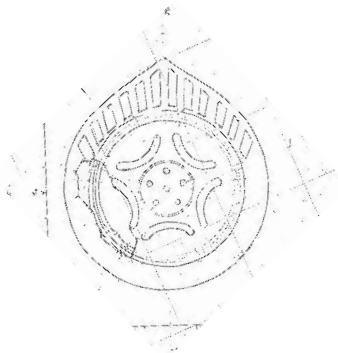


文化財コラム 寺内廃寺の出土の「金銅仏光背」

小さな銅板片です。寺内廃寺の金堂基壇上のやや北側から発見されました。かまぼこ状に盛り上がった圏線の内側に突出部を作り出すほかは、折れた破断面をしています。おそらく小金銅仏の光背ではないかと考えられます。

現状から圏線の直径は12cmほどに復元すること可能なので、円弧状のスカシを五個持ち、中心飾りには蓮実を置く復元案としてみました。弧線状のモチーフは5分割がちょうどいいようです。左上部に切り込みが遺ることから方形状の炎光をうがつ形としてみました。類例は見当たらないようですが一案です。

寺内廃寺からは主尊の「塑像」破片も出土しており、塑像の本尊と金銅仏など多彩な仏像群が祀られていたようです。(新井)



画像：左から、寺内廃寺出土「光背破片」・想定復元図・法隆寺献納金銅仏「光背 195号」・「観音菩薩立像 185号」
像高31.2cm(7~8世紀)(参考：奈良国立博物館1981「法隆寺献納金銅仏」図録から転載)

マニアックな文化財メモ 坂田医院旧診療所

昭和6年、医師の坂田康太郎氏は、妻沼に産科医院を開業するため坂田医院診療所を建設しました。その構造は、鉄筋コンクリート造の平屋建てで、外壁表面を覆うスクラッチタイルが特徴的です。スクラッチとは「引っ掻く」という意味で、タイルの表面に櫛で平行に引っ掻いた様な模様を持つスクラッチタイルは、大正時代末期から昭和時代初期の近代建築に多く使用されました。原料に含まれる酸化鉄が焼成されることで生まれる赤褐色～黄褐色の味わいのある色幅が建物に趣を与えます。このほか、内部の柱や天井の隅に巡らした蛇腹と呼ばれる帯状の意匠やアールデコ調の照明など、建物各所のディテールから当時のレトロモダンな雰囲気を楽しむことができます。(山川)



編集後記

「比企丘陵の天水を利用した谷津沼農業システム」の日本農業遺産認定は、感慨深い吉報となりました。過去数回、申請するも落選が続く中、その課題事項として歴史的資料の不足という指摘があり、先史時代から近代に至る江南地域を含む地域の谷津沼・谷津田に関する資料の収集と分析を進めてきました。調査報告に向けた資料提供や、現地説明会でのプレゼンテーションを通じて課題克服できたことは幸いであり、認定に向けて尽力された多くの方々の努力の賜物と感じています。また、3月の認定記念式典では、文化庁100年フードの熊谷銘菓「五家宝」が配布されたことも、熊谷の文化と農業を結び付ける貴重な出来事となりました。(山下)



発行：令和5年3月20日(2023/3/20)

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<https://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記2」、熊谷市観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中